

キャンヘルプタイランド

ネットワーク通信

2009年10月24日発行 第47号

バンコク便り

タイ・バンコク在住の西川会長から

日本では有名私立小学校への入学を目指して就学前の幼児が塾通いをするを「お受験」と呼んでいるようですが、みなさんはこの「お受験」についてどう思われますか。子どもの将来のために当然のことと思われませんか。それとも、受験などさせず、のびのびと育てるべきだと思われませんか。

日本から来て間もないある先生が日本語の授業で、ディスカッションのネタにしようとする「お受験」を特集したテレビ番組を学生たちに見せたそうです。その先生は上に述べたような賛否両論が出て、ディスカッションが大いに白熱することを期待したようですが、実際には学生全員が、子供の将来のためには、そのぐらいさせるのは当然だという考えを異口同音に述べるだけで、まったくディスカッションにならなかったそうです。日本人は、とかく日本は学歴主義だとか日本の受験戦争は激しいとか考えがちですが、昔の日本ならいざしらず、今となってはそれも幻想にすぎないのだと、授業の前に言ってあげることができればよかったです。私の学校に来る学生たちの中には、日本が好きだからということ以上に、就職の際の武器にしようとする自分への付加価値をつけるために日本語を学ぶ人が少なからずいます。ここタイでも中流、上流と言われる人たちは、少しでもいい教育を受けさせようと、子どもを塾に通わせ、外国語を習わせ、情操教育にもお金をかけ、お金があれば外国に留学させたりしています。地方から親戚や知人をつれて、バンコクへ越境入学してくる子どもも珍しくありません。そうした事情をタイに来て間もない先生は知らなかったようです。

なぜこれほどまでに教育熱が高いのか。それもこれも、やはり将来の安定した人生設計には学歴が欠かせないと親も子も認識しているからでしょう。日本では、学歴がなくとも努力と能力とを以って一流企業の重役にまで上り詰めたという話をよく見聞しますが、ここタイでは自分で事業を興しもしない限り、そういったことはほぼ不可能ではないかと思えます。私の周りにも働きながら、社会人向けの大学や大学院のコースに通う、あるいは通ってきた人が数え切れないほどいますが、それも少しでも上を目指すためには学歴が不可欠だからです。また、経済学部を卒業して日本語教師になったり（私ですが）、文学部を出て銀行に勤めたりする友人がいるように、日本では大学で何を勉強したかとか、大学での成績がどうだったかとかいうことは就職の際にさほど大きな問題にはならないようですが、大学での専攻や成績が職を得る上で大きく物を言うタイでは、私のような経歴はタイ人には非常に奇異に映るようです。求人票を見ると、大学での専攻を限定しているものがほとんどですし、学業成績の下限を設定し応募の条件にしている会社もあるほどです。

冒頭のクラスの学生たちの発言も、タイが厳然とした学歴社会であることを考えれば当然かもしれません。逆に、こうした社会の波に乗り切れずにいるのが、私たちが支援している貧しい子どもたちです。その原因の一つは貧困、もう一つはおそらく教育に対する意識の欠如なのではないかと思えます。

安くてレベルの高い公教育のおかげで、だれもがチャンスを掴み得る社会が、公教育のレベル低下によって経済的に余裕のある人だけが塾などに通っているいい学校、いい会社に入れる社会になってしまった、という日本の報道を紹介すると、学生たちは「今のタイと同じです」と言います。同時に、貧しい人たちに同情はしつつも、努力した人がそれに見合うリターンを得ることのできる今の社会を容認しています。（ちなみにタイは管理職と一般事務職の給与格差が10.7倍で世界第2位です。）

いい学校、いい会社に入れば幸せになれる、という発想自体、すでに豊かになった日本人には陳腐なものにしか映らないかもしれません。私自身も初めは彼らの拜金主義的なところに嫌悪感すら抱いたものです。しかし、金持ちのお坊ちゃん、お嬢さんは別にして、決して裕福ではない中流家庭に生まれ育った彼らが自分の努力でチャンスをつかみ、食べられなかったものが食べられるようになり、買えなかった車を買えるようになり、行けなかった海外旅行に行けるようになるのを見ると、彼らの言う幸せを否定できません。もしかしたら、彼らの感覚は私の両親世代の日本人が高度経済成長期に働きつめに働いて夢を叶えていった感覚に似ているのではないかと、とも思うのです。今では彼らの自己研鑽への飽くなき努力に敬意を感じずにはいられません。

今日もまた、仕事帰りのサラリーマンがやってきて、眠い目を擦りながら私の授業を聞くのでしょ。そして、私はそんな彼らの手助けができることに幸せを感じ、自分ももっと頑張らねばと思うのです。

西川弘達@バンコク

報 告

～プレオパン・ヤムタイ（キック）の件～

報告者：西川

2002年以降に会員になられた方の中にはご存じない方もいらっしゃると思いますが、2001年当時当会の現地職員として働いていたプレオパン・ヤムタイ（以下キック（通称））が会の資金を横領し、逃亡するという事件が起こりました。それまで約5年間職員としてすべてのプログラムに関わり、日本から参加のボランティアからも非常に慕われていた彼女が突然起こした事件だけに、私たちは大変なショックを受けました。2001年度の総会で、対応策を協議したところ、彼女を知る会員の方々から、警察には届けずに彼女の将来に傷がつかないように話し合いで穏便に対応してほしいという意見が出され、その後、私たちは逃亡した彼女に代って彼女の家族と協議を続け、少しずつ返済を受けてきました。

8月初旬、そのキックから、突然私に連絡があり、直接会って話す機会を得ましたので、ご報告いたします。その際に手紙を一通言付かりましたので、手紙の内容を日本語にしたものを以下に記します。

西川弘達様

あの件があってから、一日たりとも心が休まることはありませんでした。頭に浮かぶのは罪の意識ばかりです。寝ても夢に見るのは弘達さんやむさん、キャンヘルプの皆のことばかりでした。私はひどいことをした悪人です。

皆さんに会いたいと思いつけてきましたが、その勇気が出ませんでした。とにかく怖くて、恥ずかしく思ったからです。皆さんには、特に弘達さんには大変なご迷惑をおかけしました。

弘達さんは何も悪いことをしていないのに、疑いをかけられる原因を作ってしまった。（注 当初、私がキックと共謀して会のお金を横領したと日本のメンバーに疑われているとキックの家族に説明していました）

私は使ったお金を盗み取るつもりはなく、返すつもりでいました。両親からも人の物を盗るのはよくないことだ教わってきました。しかし、私は欲望に負け、人生の中で最もおろかな事をしてしまいました。

このことは両親をも困らせました。

今回、私がしたことは、罪の意識となって、いつまでも私にまとわりついてきました。どこへ行くのも、何をするのも、だれに会うのも怖くなりました。今、精神的に少しずつ落ち着いてきたこともあり、何でもいい、自分が犯した過ちを償うために、勇気を振り絞ることにしました。私は死人同然です。ただ、息をしてかろうじて生きているだけです。希望も何もありません。人生は短いものです。私の最後の希望は、弘達さんやキャンヘルプの皆さんが私の罪を許してくれることだけです。

弘達さん、レイ先生、新井先生、むさん、そしてキャンヘルプの皆さん、本当に申し訳ありませんでした。

悪人キックより

なぜこんなことをしたか、その金をどう使ったのか聞きましたが、明確な答えはありませんでした。少し借りては返し、借りては返し、を繰り返し、そのうち帳簿の報告まで帳尻が合わなくなり、首が回らなくなってしまったのだということです。警察に突き出されるのが怖くて、家族も徹底して知らぬ存ぜぬを貫き通したそうです。その後、警察に通報しろという意見があった中で、キャンの総会ではキックを知る人たちが、「キックがこんなことをしてしまったのには何か理由があるはずだから、警察には知らせないでほしい」、「キックの将来に傷がつかないように穏便に処理してほしい」と口々に言ったので、会としても話し合いで解決しようということになったのだ、と言うと、彼女は涙を流して泣いていました。

我々が最初に請求した返済額が、慰謝料も含めて1,859,338バーツ、既に返金があったのが、1,320,000バーツです。残額の返済を約束して、彼女は帰って行きました。

特集記事

～2009年度ワークキャンプ報告～

報告者：松本

09年度のワークキャンプは、8月22日～29日の9日間の日程でサケオ県のタイ・サマッキー学校において「集会場建設」を実施しました。

今回も、建設プログラムから30万パーツを援助して集会場の建設に参加する形でWCを行いました。

今回訪れたバン・タイ・サマッキー村（学校と同じ名前です）はサケオ県の東北に位置し（アランヤプラテート（国境）から北へ60キロ、サケオ市内から100キロ）、プリラム方面へ通じる国道に面しているため夜になってもかなり交通量（ほとんどがトラック）が多い場所にあり、国道を挟んで学校と村がありました。

村の周辺は水田が少なくキャッサバとタロイモ畑が広がり（お陰で夜になっても虫に悩まされることも少なく参加メンバーは快適な生活を送ることが出来ました）、遠くには500～700メートルほどの山が見える農村で、25年前に軍用地の払い下げによって誕生し、1000人程の村人のほとんどは県外（多くはロイエット県）からの移住者で、それだけに村の人達は「村をもっと良くしていきたい」という目標に向かっての結束力が強く、子供の教育の重要性も皆が理解している様子が感じられ、学校に対しても非常に協力的なところが印象に残りました。

タイ・サマッキー学校は23年前に出来、幼稚園（年中、年長）と小学校の複合施設で各学年1クラス、生徒数は150人程で先生は校長先生を含め9人というこじんまりした学校で、校長先生が教員として15年この学校で子供たちを教え、4年ほど他校で勤務した後校長として戻ってきた人ですので（村の人達の親戚の事までほとんど知っているそうです）校長先生のリードと存在（ちなみに校長先生の奥さんとその妹さんもこの学校の先生です）が村との一体感をより強くしていると感じました。

今回の参加者は7人（男性4人、女性3人）とWC史上最少数人数でしたが、参加メンバーの年齢が19歳～72歳と幅広かったにもかかわらず、リピーターが5人いたことや少数人数であるがゆえにメンバー間の意思疎通がスムーズにいった事でまとまりが出来、学校での滞在が日曜日の午後から土曜日の朝迄の6泊と短かったにもかかわらず、とても楽しく有意義なWCを過ごすことが出来ました。

今回のWCが楽しく過ごせたのは提携団体の「フリー」から参加した2人の大学生（ノックちゃんとファイちゃん）の参加によるものも大きく、特に交流授業において彼女たちが我々メンバー2名とペアを組んで通訳をしてくれたお陰で、同時に3チームの授業がスムーズに実施することができた事と、ホームステイ時にホストファミリーや村の人達との交流で不便を感じなかったことは彼女たちの協力なくしては語れないと思います。

今回建設した集会場は我々が到着した時には村人と学校の協力で既にほとんど出来上がっており、労働は2日間と短いもので10M×15M位の床のコンクリート張りを残すのみでした（その床張りも我々の為に仕事を残しておいてくれたそうです）。そのコンクリート張りも、生コンこねは機械があったためにバケツリレーと流し込みの作業だけで、驚いたことに村の人達が80人近く参加された為に午後の早い時間には一日の予定が完了してしまうほど作業がはかどりました。

村の人達の参加は上記の人たちに止まらず、皆の昼食も村のお母さん達が20名近く参加されており、改めて学校と村の人達の結びつきの強さに感心しました。今回の労働は「筋肉痛」で動きが鈍くなるメンバーも出ず、100人近い村の人達や先生も一緒になってのにぎやかな昼食時間など、

どちらかと言えば楽しい労働でした。皆で一緒になっての昼食は、我々が村の人達と知り合う機会であったと共に、村の人達が初めて接する外国人である「日本人」を観察したりメンバーを知る上でとても役に立ったようで、後日実施したホームステイの食事をどんなものにしようか迷っていた村の人達は「同じものを食べている」事が判ってとても安心したそうです。

このように、労働日数が2日であった事で子供たちや村の人達との交流に時間をたっぷりとって、（できるだけたくさん授業をして欲しいとの学校からの要望で）メンバー全員が日本の紹介や折り紙、日本語やダンス等の授業を2回以上実施し、村の男性陣と一緒に楽しいお酒を飲んだり女性陣と一緒に料理や後片付けをする等の有意義な時間を過ごすことが出来ました。

今回のWCで特筆すべき出来事として集会場の「完成式典」に参加できたことでした。従来はどちらかと言えば建設の初期段階で実施するWCが多かった為に建物の完成した様子を見ることは出来ませんでした。今回は月曜と火曜の2日間で建物は完成させ、28日の金曜日にはこの



学校を管轄する県の教育委員会のサックオ第 2 地区教育事務所の人達や 15,000 パーツの寄付をした 2 人のタイ人実業家を招待して、村の人達も数多くお手伝いに来られ、文字通り「村を上げて」の完成記念式典が実施されました。

式典に先立ち前日に皆で作った祭壇で我々メンバーの幸福を祈るお祈りと、その願いを込めた「白いひも」を手首に結んでいただき、メインの記念式典に移りました。

今回の集会場は、キャンヘルプタイランドの多くのドナーの方々の援助をメインに村の人達の労働力も加わって完成させ、その建物をサックオ県へ寄付し、県の資産として県の教育委員会が今後の管理をしていく形の中での、いわば「県への贈呈式」の意味合いも兼ねた「完成式典」の為、我々メンバーはその式典においては「主賓扱い」をしていただきました。その式典においてはサックオ県第 2 地区教育事務所長よりの「感謝状」を頂き（その文章は直訳すると「30万パーツを寄付したことは名声の誉れである事を宣言する」と言う内容のようです）、答礼では「この寄付金は多くのドナーの方たちからのものであり、村の人達や学校の熱意なくしては実現しなかった」旨の挨拶をさせていただきました。



建物の上部には「キャンヘルプタイランド 2009 年 8 月 23 日～28 日」の看板も掲げられ、セレモニーと記念の植樹も実施されたこのような「完成式」に参加できたことで、我々の援助が形となった状態を実感する機会を体験できて思い出深い出来事でした。

ここに、皆様からの多額のご寄付を、キャンヘルプタイランドを代表してお届けする栄誉を担えたメンバー全員を代表して、改めてお礼申し上げます。

式典の後は、女生徒たちや我々メンバーの有志とファイちゃん、ノックちゃんがきれいな衣装とお化粧を施して参加した「タイ古典舞踊」や招待客や先生、村の役員の人達での昼食会で大いに盛り上がった記念行事を終えることが出来ました。

夜はメンバーの「送別会」と先生や村の人達や子供たちも参加しての「慰労会」を兼ねての「タイスキパーティー」を、完成したばかりの集会場に 50 人以上が集まり開いてくれました。最後の夜の気の置けない、いわば「内輪」の食事会であった為、メンバーも「ちらし寿司と海苔巻き」を作って振舞い(?)皆でタイスキの鍋をつつき、飲み物を酌み交わしながら記念写真を撮ったり、メンバーや村の人達の歌や踊りも飛び出して和気あいあいの思い出深い時間を過ごすことが出来ました。



翌日朝の出発の時は皆の気持ちの中に「満足感」が満ちていた為か、涙はなかったものの今度はいつ会えるんだろう・・・の空気の中お互いが「後ろ髪を引かれる」思いを皆が感じているようでした。

今回の WC は、メンバーの協力で病気や怪我もなく無事に全員が帰国することができたことと、皆さんのアンケートを参考にしながら来年からの WC を実施していく事をお知らせして報告としたいと思います。

●参加者手記のご紹介●

キャンヘルプタイランドワークキャンプに参加して

杉浦 由佳

私は大学生のうちいろいろなワークキャンプに参加しました。フィリピンに 3 週間、ベトナムに 10 日間行き、3 回目のワークキャンプとなりました。恐らくこれが学生最後のワークキャンプとなるでしょう。海外ボランティアと東南アジアに魅せられて、このキャンプを選ぶのにほぼ迷いはありませんでした。でもやっぱり思うのが、国のおい、味、雰囲気・・・同じ東南アジアでも感じるものは全然違うということです。

今回海外ボランティアは 3 回目であるにもかかわらず、戸惑うこと、大変なことが多かったように思います。特に生活面。私は質素な生活だと逆にわくわくしてくるのですが、トイレやシャワーの使い方に慣れなかったり、食事が辛かったり、虫を食べたり・・・(笑)なかなかハードなことが多くありました。そのぶん、日本人と苦労を分かち合っって仲良くなれたような気がします。

このキャンプでとても印象に残っているのが、「人の温かさ」。村の人や学校の先生、子どもたちがこんなにもフレンドリーにしてくれるとは思いませんでした。ほとんどの人が、日本人を初めて見て、初めて交流したことでしょう。見ず知らずの日本人がいきなり一緒に生活することになったのに、とても歓迎してくれました。一緒に汗を流しワークをしたり、ハイキングや観光に連れて行ってくれたり、家に泊めてくれたり、完成式を楽しんだり。彼らの中にはどうしても「日本人はこれで満足してくれるのかな」という思いがあったそうです。日本人は自分たちよりいい生活をしていると思っているようです。でも、本当にそんな不安はひとつも必要ないぐらい、私達は楽しめました。満足どころじゃありません。それ以上に楽しさや感動をもらいました。それに、言葉が分

からなくても通じ合おうとする気持ちがあればお互いのフィーリングは伝わるんだと思いました。

そして、やはり子どもの笑顔は万国共通です。ととても癒され、また礼儀正しい子どもたちにとても感心しました。

また、バンコクの学生のファイちゃんノクちゃんとの交流もとても心に残っています。最初はお互い言葉があまり話せないし、通訳がないと意思疎通が図れないのかなと思っていました。しかし、毎日 24 時間ずっと一緒にいたおかげで、自然と仲良くなれました。英語でなんとかコミュニケーションをとり、ホームステイや村人との交流、学校の授業のときにはすっかりお世話になりました。彼女たちもまた、年齢が近い私たちと感じていることは似ていて、同じことで笑いあうこともできました。また私がタイに来たときには観光ガイドをしてね、と約束しました。お別れのときも涙は流さず爽やかなお別れができましたが、やっぱり帰りの飛行機で寂しくなっていました。

そして、日本人参加者の皆さん、特に男性の方たちと話しているときは本当に面白かったです。私より何十年も長く生きている人たちなので、自然のことや歴史のこと、日本のことは本当によく知っています。何でも聞いたら答えてくれて、とても勉強になりました。

やはりワークキャンプだけあって、観光でタイに行ったとしたら感じられない人の温かみをたくさん感じました。村の人々や学校の人は本当に大きな親戚のように見え、またこの村に来たいと思いました。実は去年ベトナムに行ったときにはホームシックになってしまい、今年も同じようにならないか心配でしたが、今回はむしろタイでの生活をあまりに楽しんだので時間が経つのを早く感じ、日本に帰ってからタイが恋しくなるほどでした。

本当にたくさんのかんじさせてくれたこのワークキャンプ、学生最後の夏休みの 9 日間を使って行ってよかったと思います。タイがとても好きになりました。

2009年 夏のワークキャンプに参加して

三重大学人文学部 2年 馬淵麻由

私は中学生の頃から国際協力に興味があり、大学に入って学校行事やイベントで様々な国際交流の機会に恵まれたこともあり、本格的に国際協力に関わりたいと考えるようになりました。学内や学外でセミナーに参加したりしているうちに、中学生や高校生の頃にただ思い描いていただけの国際協力のイメージも変わってきました。良い面も悪い面も、難しい面も考え、将来自分はどうしたいのか悩むようになりました。

そんなとき、このワークキャンプを知りました。この夏、絶対に行こうと思いました。一人で考えて悩むより、とりあえず一度現地へ飛び込んで生活してみないと始まらないと思いました。

心配性の塊のような祖母には反対され、でも最終的には軍資金をもらい、同じく心配性で胃が弱い母親に見送られて、わくわくと少しの不安で旅立ちました。

国境市場などの観光を経て、小学校へ到着。現地ではタイの料理をたっぷり頂きました。ほとんど口に合わないものはなく、ちょっと辛さにひるみながらも毎日美味しくお腹いっぱい食べて幸せでした。

寝泊まりさせて頂いた幼稚園の校舎も、想像していたよりとても綺麗な建物で、トイレもシャワーも近くにあるので便利でした。

リピーターの方々に教わりながら、生まれて初めて蚊帳を張りました。とても新鮮な光景でした。その他、自分で洗濯をして干したり、蟻が寄ってこないように工夫したり駆除したり、ゴミを燃やしたり掃除をしたり、現地で生活するというのはいかようなのだと実感しました。

先生方や村人の皆さん、学校の子供たちもとてもフレンドリーに接して下さい、一緒に皿洗いをしたり作業をしたり、紙飛行機を飛ばして走り回ったり、楽しくコミュニケーションをとることが出来ました。

朝早く起きて朝食の準備を手伝ったり、夜はすることが無くてヒマなのでみんなで星を見て早々と寝たり、車の荷台で風に吹かれてひたすら真っ直ぐな道を移動したり、普段の日常からはかけ離れたのどかな生活を送ることができました。

大学へ行って、あくびをしながら授業を受けて、部活や行事に参加し、やたらとバイトに追われて忙しくて常に疲れている生活から解放されて、日本でいろいろな悩みがちっぽけなことのように思えてどうでもよくなりました。国際協力、と思って参加しましたが、自分の精神に良い影響を与えてもらったことのほうが大きかったです。同時に、これから自分はどういう形で国際協力に関わっていくのかを考える上で、フィールドワークとい

う、現地での生活を学ぶことができました。きっと今後の大学生活やそのずっと先にも大きな影響を及ぼす経験をさせて頂きました。とても充実した9日間でした。本当にありがとうございました。

最後に、一緒に参加した杉浦さんと共に、タイ式の便器の使い方を最初っから最後まで間違えたままだったのが残念でなりません。あの便器って・・・反対向きに使うんだね・・・。

報 告

～奨学金プログラム報告～

報告者：白柳 美穂

1. 「Nたま研修（翻訳会）」

9月13日（日）キャンヘルプタイランド事務所で第3回翻訳会を開催致しました。

今回は、将来 NGO を目指す「NGO のたまご（通称：Nたま生）」5名が研修も兼ねて、翻訳会に参加されました。参加者は、大学生、社会人が半々でタイでボランティア活動やインターンを経験された方が半数以上いました。

当日の流れは、13時～15時「翻訳会、活動紹介、質疑応答」、15時～16時「ワークキャンプ参加者による体験談」の順で行いました。

まず、「翻訳会」では、6月にタイ東北部で奨学金授与式を行った際、奨学生から受け取った申請書類や手紙の翻訳作業を行いました。タイ語で書かれている文字をタイ人に訳してもらい、日本人が日本語で書類に直接翻訳文を書き込んでいきます。

今回も大久保スリラット先生をお招きして翻訳作業を進めていきました。作業の途中で、Nたま生から質問を受けたり、大久保スリラット先生からは奨学生の手紙の内容からタイの文化や行事についてお話していただきました。

そして、翻訳後「今年度&過去のワークキャンプ参加者による体験談」、カサロンで長期ボランティアをしていた浅井美里さんからは「日本にいながらできる国際協力」についてお話していただき、質疑応答や情報交換などを行いました。



2. 「奨学生からの手紙」

タイから届いた奨学生の手紙を何枚かご紹介させていただきます。

崇拜する皆様方

私はアティタヤー（女）です。長い間手紙を書きませんでした。皆様お元気ですか？

皆様の地域では雨が降っていますか？田んぼには雨が降っていますか？

私のところでは、田植えが終わりました。今年の米の販売では利益が全然出ませんでした。米は害虫のために価値が付かなかったからです。

私に奨学金を与えて下さった方には、本当に感謝しており、崇拜申し上げております。おかげで私は進級出来ました。私は家の手伝いをするのが出来てうれしいですし、また、学校では地球温暖化防止の活動を始めました。川のごみを集めて、それで木を育てたり、廃材でロボットを製作して、中学1、2年生は大会で2位の成績をおさめました。

新学期が始まって、私はたくさんの友達に会えるのがとても楽しいです。

皆様方がいつまでも長生きでお元気でいらっしゃるようお祈りして、手紙を終えたいと思います。またお手紙書きます。

アティタヤー ホームウォン



2000年6月24日

こんにちは。私はウィラー ウォンワチェット(女)といいます。ニックネームはフェブです。シーカットワールアングウェート学校で学んでいます。

今、私は中学1年生で、今年は中学校での最初の年であり、基金からの奨学金を頂くのは2年目の年です。私は、ずっと支援して下さい、私達に奨学金を与えて下さる方々に感謝しております。本当にありがとうございます。

私は、国の将来のために一生懸命勉強し、大きくなったら他の人を援助できるようになることをお約束します。もし大きくなったらよい人間になり、私が受けた皆様からの援助の恩を忘れません。

私からは皆様にお渡しするものが厚恩の言葉しかありませんが、皆様が幸福と発展に恵まれ、長生きで健康で、いつまでもお元気でいらっしゃるようお祈りしております。



敬具

ウィラー ウォンワチェット

3. 「ドナーの皆様へ」のお知らせ

10月18日(日)に奨学金授与式で受け取った奨学生の申請書類、手紙、写真一式をドナーの皆様へ一斉に発送致しました。

授与式後、名古屋で月に1回翻訳会を開催し、遠隔地の在宅翻訳ボランティアにも翻訳を手伝っていただき無事翻訳が終わりました。送付させていただきました書類の中に奨学生からの手紙が入っています。ドナー様からのお返事を心待ちにしている子どもたちがたくさんいます。

事務局ではドナーの皆様から奨学生への手紙を受け付けております。日本語で結構ですので事務局に手紙を送って下さい。こちらで「日本語→タイ語」に翻訳し、責任を持ってタイの奨学生の元へ届けます。ご協力よろしくお願い申し上げます。

<送付先>

〒450-0003

名古屋市中区名駅南2-11-43 日商ビル2階

NPOステーション内 キャンヘルプタイランド 翻訳係 宛て

連載記事

～3月交流ツアー旅行記 後篇(3月24日～3月28日)～

著者 市野忠士 様

3月24日(火) 良く眠れた寝台

走り出しても列車の速度は上がりません。ゆっくりゆっくり進みます。バンコク市内には始発駅以外にも止まる駅がいくつかあります。それらの駅には引込み線も多数有り、なんと線路の上に店が並んでいます。

市内を抜けると少しスピードが上がりましたが、最後まで100kmを越えるようなスピードはでませんでした。出せないのか出さないのかは不明です。レールはロングレールになっているようであまりガタゴトと音を出しません。

信号が赤になっていて良く止まります。遅れを取り戻そうとしているようには見えません。途中からは単線になりますので、どうせ1本だけ急いでも全体が遅れてはうまくすれ違いできませんので、あわてないようです。

外は暗くなり、バンコクを離れるとあまり見るものがありません。ベッドメイクをしてもらって眠りにつきます。酒と疲れのためかよく眠れました。温度も快適でした。

朝方になって眼が覚めましたが、すでに1時間以上遅れていて、まだチェンマイまではかなりあります。周りが明るくなり出しました。ナコンランパンと言う駅に止まりました。朝の4時21分着のはずですがすでに明るくなって

います。

その後峠越えがあり、標高500mまで上がり、トンネルを抜けるとクンタンと言う小さな駅に止まりました。そして坂を下り、ランブーンからチェンマイへと進みます。9時少し過ぎに、チェンマイに到着しました。朝食は列車の中で食べました。食堂車へいなくても注文すればもってきてくれます。

2時間少しの遅れです。日本なら特急券の払い戻しですが、こちらではそれはありません。

希望の家へ

チェンマイ駅はチャンマイ旧市街地のすぐ東にあります。こじんまりしたところで賑わいはありません。観光客は列車でなく飛行機でバンコクと行き来します。

6人いるからソンテウ(トラック改造のバス)を貸し切るかと思ったら、ムさんは定期のソンテウで希望の家に行くことにしました。どうせ今日は何もすることのない日ですので、あわてる必要はありません。今日中につければよいのですし、私にとっては定期バスの乗るのも体験のひとつです。

なお、子供たちの乗ったバスは、昨日の正午に海の家を

出て、今朝の3時に希望の家に着いたそうです。15時間のバスの旅です。もっとも我々も列車だけで、13時間かかっています。

しばらく待ってソントウに乗り、郊外のポーサーンという唐傘製造で有名な町を越えて、国道1014号線に入ります。この道路は2年前には道路拡張工事をしていましたが、今では4車線の広い道路になり快適に走ります。心なしか住宅地も増加した感じです。チェンマイ市がもう少し人口増になったらこの周りも住宅街で埋まることでしょう。

ポーサーン市とドイサケット市のほぼ中央の一番田圃らしいところでバスを降ります。そしてそこから2kmの田圃の中の道を歩くと希望の家に到着です。その道路の入り口には日本語でも、「希望の家2km」と書いてあります。この道を歩くのは初めてです。いつもはトラックで行き来します。思ったよりも遠い道のりでした。やはり疲れているのでしょうか。

希望の家に着くと、挨拶をして部屋を割り当てられました。水野さんは泊らずに日本へ帰りますので件さんと二人の部屋割りになります。

土の家(カサロン)へ

希望の家で休憩していましたが、12時を過ぎても昼食の合図がありません。朝ごはんが食堂車のお粥だったので少し腹が減って来ました。子供たちは今朝遅い朝食を食べたために、昼食はまだそうです。そこで、我々だけで昼食を外で食べることになりました。国道1014号に出てドイサケット市の方へ少し行くときれいな食堂ができていました。後2・3年後には希望の家の前辺りまで住宅街が広がるのではないかと思います。

そく後は土の家に帰る子供を送りながら見学にでかけました。水野さんは希望の家も土の家も始めて訪れたのですから、その解説を件さん辺りが行えばよいのに何の説明もしません。しょうがないから私の乏しい知識で説明してあげました。内容が違っていただかもしれません。

希望の家はエイズなどで両親がなかったり、養育できなかつたりする家の子供を引き取って面倒見るところです。それに対して土の家は山奥で、就学の遅れている子供たちを集めて一応養育費(年間3000パーツ:約1万円)を少しもらって面倒見るところです。今は夏休みに入ったのでほとんどの子供は海の家から帰ってきて帰宅中で、土の家は開店休業の状態です。

この3月までは13人でしたが、5月からは3人増えるそうです。豚は1匹しかいませんでした。コレラで沢山死んだそうです。ニワトリは半分ほどいましたが、これも、インフルエンザの関係で全部処分したのですが、小学校が引き取ってくれともって来たのだそうです。同行してきた子供二人は姉弟で、実はこの土の家の子ではなくその隣のラフ族の村の子供でした。ともに音楽の得意な子で高級ホテルで独唱・独奏した子です。

ラフ族の村

土の家の隣にラフ族の村があります。3年前の時はありませんでしたが、2年前に来た時はできたばかりでした。そこへ子供と共に出かけました。

3年前とは大違いでした。まず村の奥にポンプ場ができて、水道が引かれているのです。2年前の時には土の家にもらい水をしていました。さらにどの家にも電気が引かれています。また、姉弟の家は竹の家からブロックを積んだ本格的な家に代わっていました。これを見ただけでびっくりです。

姉はチェリーと言い、中学2年生(15歳)で、英語は学年で一番だそうです。また弟はジョニー君で小学校6年

生(12歳)だそうです。さらに今回海へは行きませんが、その下の弟スィツ君が留守番をしていました。小学校4年生で10歳です。上の二人だけ土の家の子達と海へ行かせてもらったのです。

両親は共稼ぎで家事は全て子供たちで行っているそうです。政府の政策により、コーヒー園で働くとかほより沢山の賃金がもらえるのでそうです。更に、田圃も借りて米を作っています。養鶏場で働くこともあります。このようにして蓄えたお金で家を新築できました。竹の家だと3年に一度は屋根などを葺き替えないといけなそうです。昔は自分の家で材料を集めて作っていましたが、今はそれらの材料を専門に売る店もできました。

この家の母親が音楽大好きで、子供たちに教育しているのです。男の子はギターも弾けますし女の子は民族楽器の太鼓をたたくことができるのです。この家だけでなく何軒かがブロック積の家に住んでいました。ラフ族が町の近くに住みつけて成功した良い例です。土の家などの協力もあります。

水野さんを送る

水野さんは自分で飛行機の切符を買って参加したのですが、帰りの飛行機がうまく取れずに今夜の便で日本に帰ります。わざわざ夜行列車に乗る体験のために来た状態です。

4時に土の家を出てチェンマイ空港に向かいました。チェンマイ空港は何度も利用していますが、空港の施設が新しく変わって国際線と国内線が分かれました。バンコクでは乗り継ぎ時間がありますが、外に出たければチェンマイからの便は国内線扱いにするが、外に出ないのなら国際線扱いで、チェンマイで出国手続きをするからどちらか選べるようです。

水野さんは面倒だからこちらで出国手続きをするように希望しました。ムさんがいてくれるとこのような話が簡単にできます。

水野さんを送り出した後で、帰りにポーサーンの市場で夕食を取りました。この市場は3年前に最初に食事をしたところですが、場所も代わって立派になっていました。

タイの国は今急速に近代化されつつあり、3年前とは大きく変わってきています。もっとも現在の経済危機を乗り越えなければなりません。それでもタイの経済の落ち込みは日本よりかなり良い状態です。

タイの国の第二の都市であるチェンマイも急速に発展しつつあります。特にこの郊外の状態が大きく変わっています。道路が広く整備され、住宅地がどんどん広がっています。

しかし、明日行く山間部の少数民族の村はほとんど変わっていません。昔ながらの竹や椰子の葉の家で、自給自足の生活を続けています。早くタイの国全体が成長してもらいたいものです。それにラオス・雲南省・ミャンマーの経済成長と交易が必要です。

3月25日(水) ファイナムディ村へ

今日は山のラフ族の村を2村訪ねます。最初に向かった村の子供を送りがてら、タサニーさんの村の状態の見学です。その村はチェンマイ県の北部に属しているチャイプラカン郡にあります。チャイプラカン郡の西部はミャンマーと国境を接しています。いわゆる黄金の三角地帯(タイ・ラオス・ミャンマー三国国境)の近くです。国道から反対に入りましたのでミャンマーからは離れました。チェンライ県との県境の岡の上に村があります。

幸いに小学校を見せてもらったので人口状態がよく分

かりました。この村について一番奇妙に思えたのが田圃はもちろん畑のないことです。山岳民族は焼き畑農業で生活しているはずの畑がないのです。国立公園に指定されて焼畑ができないところとなり、立ち退きを迫られているそうです。

それにしてもどうやって生活しているのでしょうか。麻薬の密売があるそうですが、元希望の家にいた人の家を訪ねて、時々学校の先生のいない時に授業を教えていることを話しました。道路が悪くて雨季にはよく欠勤するそうです。

幸いにこの日は先生がいましたのでいろいろと話が聞けました。先生はタイ人で、チャイプラカンの街から通っています。村の人口は男86人女93人合計179人です。その内14歳未満が62人で、15歳から39歳で80人、59歳までが31人で、60歳以上の老人はわずか6人だけです。学齢期の子供の登録数が、50名で、先生は一人しか配属されませんでした。毎日32人ほど学校に来ますが、昼食時になると増えるそうです。毎年12・3人が試験に受かって学校を卒業できるそうです。小学校を出るとほとんどがすぐに仕事に就き、女の子は15歳には結婚するそうです。6年生まで全部をひとりで教えることは大変です。

ブレーキの故障

ファイナムディ村を3時に出てガタガタのそろばん道路を走って、国道107号に出て50kmほど戻ります。そして国道とは名ばかりの1150号線に入り、山登りをします。次の宿泊予定のファイサイカオ(白砂の池)村までに2つの山を越えなければなりません。

ところが最初の山の峠まで行った時に、自動車は止まってしまう。左前のタイヤからブレーキをかけるたびにおかしな音がするので、山の頂上ではどうすることもできません。やむをえずゆっくりとエンジンブレーキを使いながら峠を下ります。

盆地の中央に、フラオという街があります。そこのガソリンスタンドまで何とかたどり着きました。隣がコンビニですので、我々にとってはちょうど良い休憩になります。運転手さんはガソリンスタンドの修理場に入りました。

20分ほど経って、タイヤをはずしてみたが何の故障も見つかりませんでした。なにか石でも入っていつの間にか取れてしまったらと言う結論でした。

そのガソリンスタンドを出てすぐに町の市場に行って今夜の食材を買い求めました。田舎の市場の様子も分かります。昔のようにハエがたくさんいるわけではなく、こざれいな感じの市場でした。

そこを出てから次の山がとてつもない険しい山でした。夜のためにはタオルケット1枚しか持って来ていません。前回の経験からどうせ数百メートルの山と思っていたのですが、1300mを肥える高い山です。その高い山の峠付近にも別の村ですが、立派な村がありました。どれだけ進むと今日の止まる村があるのかとても心配になりました。

ファイサイカオ村

峠を少し下ったところから、村への狭い未舗装の道路に入りました。そこからは赤土の狭い道路をかなり下りました。雨が降ったらとても自動車の走れる道ではありません。

山の急斜面に畑が見えます。あのように急なところでよく農作業ができるものと感心します。谷底に当たるところまで降りるとようやく村が見えました。住宅は全てたけと木と椰子の葉でできています。集会所と学校だけが何とかブロックの家のような感じです。

でもこの村はロイヤルプロジェクト(王立産業)のお蔭でかなり裕福な村のようです。プロジェクトが決めた野菜(ほうれん草やブロッコリー)を栽培するとかなり高価な

値段で引き取ってくれるのだそうです。

お蔭で、共同井戸を掘って水道が引かれ、四輪自動車はわずかしかありませんでしたが多くの家庭にはオートバイがありました。

どの家も犬と鶏と豚を飼っているようです。これは前回訪問した時に聞いたものですが、王様から支給されたソーラーシステムが各家庭に付いていて、多くの家がテレビ・あるいはプレイヤーを備えていました。

また村内放送の設備も有り、夜の8時からは集会所でミサが開かれていました。この村のほとんどの人がクリスチャンのようです。店は村でたまた一軒だけであり、到着した時は遅かったのですがすでに閉まっています。

トイレは普通のタイ人のトイレと同じで、水で流すようになっています。溜まり方式ではありませんのでとても清潔な感じがしました。小梅の木が沢山あって、どれも鈴なりに実っていました。でも今では収穫しないそうです。売れなくなってしまったのです。

夜のファイサイカオ村

この村には27世帯の128人が住んでいるそうです。前のファイナムディ村よりかなり小さい村ですが、急斜面には沢山の畑が作られしかも、どれもビニールで覆いが付けられるのです。その作業だけで気が遠くなりそうですが、高値で売れるのでみんな頑張っているようです。

多くの家庭の縁の下にブロッコリーが袋いっぱいにして置かれています。これも高く売れるのでしょう。夕食にも出ましたし、希望の家にも土産で渡されました。室内で調理用に火を炊いてくれたのでとても暖かったです。火の恋しいほど寒い夜です。

バナナの木も沢山生えています。田圃もあります。田圃は沢山作っても売れないので自給用だけしか作っていないようです。夕食は村としての最大のもてなしをしてくれました。肉や魚が安いと言っているしブロッコリーも使われています。さらにはおたまじゃくしの入ったスープも出て来ました。

周りにある野草の多くも使われています。日本でも多くの野草が食用にできますが、さすがに最近では使わなくなりました。しかしこのタイではいまだに多くの種類の野草を使い、また自然界の昆虫や虫も食べています。

食事をした後で星を見ようと外に出ましたが、とんでもないことになります。すぐに犬どもが吠え出すのです。とにかくうるさい。夜中にトイレに行こうとしても犬が怖くて出られません。

寝るところはタイで始めて綿入りの布団を使いました。伴さんが早めに一番暖かそうなところを取ってくれましたので、心配なく温かい状態で眠ることができました。朝方はかなり低い気温になりましたが、心配ありませんでした。

3月26日(木) 帰り道

ファイサイカオ村の人たちは働き者です。朝早くから畑に出ています。たいていの人がオートバイで移動します。子供たちは朝から元気に遊んでいます。6歳を過ぎればまずは家の手伝いです。

村から帰るときに急坂で、タイヤが泥にはまってしまう。四輪駆動車でも動きません。道路脇の崖から清水が湧き出ているのです。しょうがないのでみんなが車から降りて、後ろに乗ったり最後は押ししたりすることになってしまいました。何とか脱出することができましたが、乾季でこのような状態では、雨季になったらどうなることでしょうか。村へはこの道1本しかありません。全くの陸の孤

島となってしまいます。国道1150号に出て今度は長い下りです。すぐに景色の良いところに仏像が祭ってありました。日本で言えばお地藏さんといった感じです。歩きの時代にはここで休憩して美しい風景を眺めてまたトボトボと歩いたことでしょう。

チェンライとチェンマイを結ぶ国道118号線に出ます。この道は2年前にも来たことのある道路です。県境付近には寺院と温泉があります。温泉は道路脇で激しく噴出していました。まことにもったいない風景です。近くに温泉浴場もあるようですが、誰も入りたがりません。水着を着て入る浴場です。

足湯がありました。ところがこの湯が熱すぎるのです。足を入れて3秒もしたらもう出さなければなりません。何のための足湯でしょうか、我々以外は誰も足を入れていません。みやげ物屋も並び、温泉卵も沢山売っていますし、観光客も観光バスで乗り付けてきますが、日本式の温泉ができればにぎわうだろうに。

希望の家へ

希望の家に早く帰りましたが、何もやることはありません。

まずは暑い内に、シャワーを浴びます。水しかでないのですから夜になってからでは冷たくてシャワーを浴びる気にはなりません。

その後で、一人寂しく村の雑貨屋へ行って、ビールを飲んで来ました。水野さんが帰ってしまったからは話し相手もいません。

希望の家に戻って、本を読んでいたら、西の空が真っ黒になり、雷がなって激しい雨が降って来ました。あちらこちらの窓を閉めて雨の振り込むのを防ぎました。

乾季でも4月が近づくと時々激しい雨が降るそうです。まったくのスコール状態です。その激しい雨が2時間ほど続いてようやく止みました。暑さを和らげる効果は日本の夕立と同じです。

夕食になり子供たちと食事を一緒にしますが、困ったことにその後でまたタサニーさんの家で、食事が出ます。しかも子供たちのときは1つのおかずだけですが、こちらでは沢山の種類のご馳走が並びます。それでも何がかわかりません。たいていの物は食べますが、特別に美味しいとも思いません。

糖尿病のけがあるので、なるべく食べる量を控えているのですが、アルコールがないことも食の進まない原因のひとつです。減らした食事を終えてもすぐにその席を引き払うわけにはいきません。お茶や水が沢山です。遠慮しているようで断るのも気が引けます。

食後の散歩に出かけますが、村中は犬が多くいますので、田圃のほうへと足が向かいます。川には2年前の時には虫がいきましたが、農業の関係で途絶えてしまったそうです。せつかくのきれいな田圃にも変化が出てきているんだえす。

3月27日(金) ランナータイ王国

朝9時30分に希望の家にお別れして、チェンマイへ向かいます。今日の午後3時にまた列車に乗ってバンコクに向かいます。その前に、ムさんからチェンマイの都のできる前の遺跡を見せてあげると言うことで、出かけました。

カンボジアのアンコール王朝が栄えていた10世紀ころからタイ人が中国南部から移住してきて、タイ北部に王国を作りました。そのうちのチェンマイ付近を中心に作られて王国が「ランナータイ王国」です。もうひとつスコアタイを中心とする王国もできてこちらは「山田長政」が活躍したところでした。

1290年(鎌倉末期)ごろに、チェンマイ付近に王朝ができたのがランナータイ王国ですが、その最初の都は今のチェンマイより5kmほど南にあったのです。チェンマイの東を流れるピン川が南へ流れるのですが、ある場所から東に流れていました。その場所がウィアン・クン・カンと後に呼ばれるようになるのですが、その時の王様のフィヤ・マンライ王が、ピン川の南に都を作ったのです。そこで1559年(桶狭間の戦いの前年)まで都が続いてランナータイ王国は栄えました。

しかし大洪水が起こって、この都は土砂によって、全て地中に埋もれてしまったのです。そこで1559年には現在のチェンマイの正方形の王城を建設して遷都したのです。このランナータイ王国は1894年に現在のチャクリー王朝に併合されるまで独立国として存在しました。

それにもかかわらず古都のあるところすら忘れ去られて長い間地中に埋もれていました。それが1984(昭和59)年になって突如と発見されて昔の古都であることがわかり、発掘・再建がされたのです。

ウィアン・クン・カン

ウィアン・クン・カンの発掘と再建により全貌が分かり、幅600mと、長さ850mほどの広さがあることが分かりましたが、困ったことにここはチェンマイ郊外の住宅街です。できることなら、全部の住宅を取り壊して古都公園としてよみがえらせたいのですが、民主主義の国タイではそれだけの権力を政府はもっていません。

少しずつ、重要な部分から開発して再建しつつあります。今後の研究と整備の努力によって、すばらしい古都のよみがえることが期待されます。中国だったら強制的に移転させてすばらしい観光地に変えてしまっていることでしょう。

熱帯地方ですので、一般国民だけでなく王宮のような建物なども、木造や竹でできたものは一切残されていません。それはアンコールワットの遺跡でも同じ状態です。よく調べて昔の住宅街や王宮も再建できたらすばらしいのですが、アンコールワットでもそのような建物は建てられずに広場になっています。

残されている物はレンガか石で造られた物で、そのほとんどは寺院であり仏塔です。それらの遺跡が再建されて、あちらこちらの広い地域の住宅街の中に、建てられている状態です。住宅地を取り払えば、都全体の状態が展望できますが、現在の状態では無理なようです。

環状道路の横に資料館とインフォメーションセンターがありますが、訪れる人はあまりいないようです。そして再建されて有名な場所には、寺院が建てられ、店も並び、馬車や人力車などが待ち構えていてほかの遺跡に運んでくれます。

遺跡の1部分でも住宅を取り払って、公園風にできればまたみんなの考えも変わってくることでしょう。

チェディリエン寺

ウィアン・クン・カンの中には沢山の仏塔が建てられています。瓦礫の山を良くここまで再建できたものです。もっともお手本は各地にありますので建物の形は分かれますから積み重ねればよいものです。

ほとんどが煉瓦ですから少し場所が違って同じものができます。煉瓦にはあまり彫刻が施されていません。しかし陶器にはかなり細かい絵・模様が形付けられています。

そして最高の仏塔がチェディリエン寺の四角の仏塔が一番でしょう。煉瓦と大理石が巧みに組み合わさっていて、1方向に16人(横3×5段+1)の仏像がはめ込まれています。4面ですので、合わせると64人の仏像がはめ込まれています。高さは20mほどあります。くすんだ色を

していますが、タイの国のお得意のところでは黄金色に塗り込んだらすばらしい塔になるでしょうに。

仏像の顔はすばらしく美しくできています。この塔だけでも十分に価値があるように思われました。

ほかの塔はほとんど円形の「スツーパー」の形をしています。また飾り物の馬やライオン・麒麟・蛇（ナーガ）など多くの出土品がありますので、それらを修復や模造して飾ればよいと思います。

また博物館の中には中国製の陶磁器の破片も飾ってあります。当時のランナータイ王国が中国と交易をしていたことが分かります。

王宮に関する物が少ないことが残念ですが、当時からタイ人は仏教崇拝が強くて値打ちのありそうな物はほとんど仏教に関係するものであることがわかります。すばらしい観光地をもっと活用できるようにしたいものです。

タイで一番のカレーうどん

昼食はタイで一番おいしいと言われるカレーうどんの店に行きました。カレーうどんはタイ語では「カオ・ソーイ」と言います。カレー味のスープに麺を入れて後は好みの具を入れたものです。

もっともほかではカレー味がないので、チェンマイで一番という意味です。カレー味は元タインドからミャンマーに伝わって、ミャンマーからこのチェンマイに伝わってきたものです。

不思議とタイ全体にはカレー味が広まっていないのです。日本人のようにカレー味をあまり好まないようです。日本人にとってはとてもおいしいものでした。

店の名前は「カオ・ソーイ・ラムドゥアン」と言う創業以来66年になる老舗の店です。66年前と言えば、第2次世界大戦中です。そのころに当時のビルマから伝わってきたのでしょうか。

同じようなカオ・ソーイの店はピン川沿いにいくつもあります。その中でも一番の老舗を誇る店で、沢山の人でにぎわっていました。

入り口では肉を焼いたりてんぷらを揚げたりしていました。そこで見た小エビの掻き揚げがおいしそうでしたので、カレーうどんと共に掻き揚げを注文しました。

ところが出てきた掻き揚げは細かくばらした物でした。店頭に並んでいる掻き揚げは丸く1枚になっていて、そのままかじりついてもおおいそうだったのですが、出て来た時にはばらしてあります。これがタイ風なのでしょう。

カレーうどんがわずか30バーツ（約110円）で食べられるのです。タイの庶民は1食を100円前後で済ませることができるのです。その後でチェンマイ駅へ向かいました。

ワロロット市場

チェンマイ駅に到着しましたが、まだ早いので、ムさんとインさんを荷物番にして、伴さん伊藤さんと日本人3人で、ワロロット市場へ行くことにしました。近くですので、伴さんが交渉してくれて、ツクツクで行くことにしました。ツクツクは小型の三輪自動車で、3人乗って満席になります。1kmほど離れていますが15バーツで交渉できました。さわやかな風を受けて乗り心地は悪くありません。

ピン川を渡って、ワロロット市場に到着しました。そこには感じの名前の店も沢山あります。中華街を示す中華門も建っています。元々中国系（華僑及び華人）の人々がタイにはかなり住んでいてほとんどが商人です。その中でもまた北部のチェンマイは多くいます。その中でもこのワロロット市場には多くの中国系の人々が住んでいるところ

です。大きな店から小さな店まで沢山の店が並びぎっしり込

んでいます。食べ物中心ではなく日常品の店が雑多に並んでいます。はっきりどこからどこまでとわかりませんので、にぎわっていきそうなところを一回りして約束の時間に集合場所に集まりました。

目の前に、サムローが停まっていたので、伴さんが交渉してくれて、伊藤さんと2人だけで乗りました。伴さんは別の方法を見つけるようです。申し訳ない。サムローとは自転車の後ろを2輪にして、客席を付けたものです。元々一人しか乗れないところを二人乗せてもらったのです。伊藤さんと2人では座席が少し小さすぎました。お尻がつかえました。特にピン川を越える時は停まってしまうのではないかと心配しました。運転手さんもう一寸ときつい様でしたが必死になってこぎました。

夜行列車に乗る

時刻表では2時50分出発のバンコク行きの夜行列車に乗りました。もっともまだ座席です。来る時は冷房付きの窓の開かない密閉された客車でしたが、今度は窓が開いて扇風機の風を送るようになっていきます。同じ二等寝台でもその分安くなっています。

どうせまた出発も予定通り発車しないだろうと思っていたら、なんと珍しく定刻に出発しました。なぜならチェンマイ発の列車の始発がこの列車なのです。午前中にバンコク方面から来るのはあっても、出発する列車ないのです。そのために定刻に出発したのです。

窓を開けていけば、涼しい風が入って快適です。外の風景は来た時に見てきた景色です。ランブーンを過ぎて、列車の前を見たら、ジーゼル機関車が2輛繋がっていました。この先のクントンの峠まで重連で列車を引っ張っていくのです。それでこの峠の小さな駅にも列車が停まるのがわかりました。機関車の繋ぎや引き離しなどで時間が遅れるのでしょうか。峠からトンネルを抜けて、下る時には機関車は1両に減っていました。

西の空が黒雲に覆われ、雷がなり出しました。夕刻になると、激しい風が吹き出しました。夕立の来る前の突風です。すると、あちらこちらで火が見え出します。ひどい時は線路の脇の草も燃えています。激しい風で火が飛んでいるようです。でも騒いでいる様子はありません。まもなく雨が振り出して自然と消えるのでしょうか。

ベッドに変わって窓を閉めて寝たらとても蒸し暑くなりました。窓を開けて寝たらしっかりと眠ることができました。バンコクにはわずか15分ほど遅れただけで到着しました。

3月28日（土） シラチャの町

甥がシラチャ市に住んでいます。そこでバンコクまで迎えに来てもらって、彼の家に遊びに行きました。ちょうど土曜日で仕事も休みなのでちょうど良い状態でした。地図で見るとバンコクの郊外のように見えますが、200kmも離れているのです。快適な高速道路が繋がっていて、2時間半ほどで行けました。今度行く時は迎えに来てもらわなくてもよいように、自分でバスに乗っていけるようにしたいものです。

シラチャには2000人ほど日本人が住んでいて、多くの日本人向けの商店や食堂などもそろっていて、言葉も日本語だけで十分だそう。それだけ多くの日本の工場があるのです。アパートに住んでいますが、1回はホテルのような感じで、入り口にはガードマンがおり、ロビーがあって日本の新聞が並んでいます。フロントもあり、喫茶室もあります。前漢冷房で快適な温度・湿度です。

部屋は2室あり、1つが寝室で、1つがリビング兼台所です。台所はちょっと狭いですが、料理を作ることはほと

んどないそうです。全館の掃除も専門の人がいるそうです。砂浜は汚く海水浴には向いていません。しかしアサリ獲りができます。海岸には広い公園があってよく散歩するそうです。また、江ノ島のように小さな島に橋が架かっていて、歩いて渡れます。島の岡の上にはお寺があります。回

りにはレストランが並びます。カプトガニを売ってました。ために食べて見ましたが、肉が全くありません。卵だけが食べられますが、うまいものではありませんでした。夜には空港まで送ってもらい、無事に伊藤理恵さんに合流できて、名古屋に帰ることができました

お知らせ

～新しいパンフレットができました～

JICA 中部、名古屋 NGO センター主催の『地域 NGO の「広報力」を高める研修 2009「プロのアドバイスを受けてパンフレットを作る研修」に参加しました。

タイの子どもたちの笑顔を中心に、果てしなく続くタイの青い空をカラーとし、レイアウトはプロのデザイナーに作っていただき素敵な新パンフレットが完成しました。ネットワーク通信と一緒に送付致しますので、ご友人や知人の方に配布 & ご紹介いただきますようよろしくお願い申し上げます。

また、新パンフレットと共にキャンヘルプタイランドのロゴも新しくなりました。

キャンヘルプの文字にタイの国旗をイメージして作成。

運営委員会

(2009年8月～2009年10月)

活動	月日	場所	内容
運営委員会	8月22日	事務所	ワールドコラボについて
運営委員会	9月26日	事務所	翻訳会、ワールドコラボについて
運営委員会	10月18日	事務所	奨学金資料発送作業

運営委員募集

一緒にキャンヘルプタイランドの運営に参加してみませんか？

通常は毎月第4土曜日に事務所に集まり、会の運営について話し合っています。見学でも結構ですので是非事務所へ遊びに来てください。

次回の運営委員会は 11月28日(土) 13:00～ (事務所にて) です。

編集後記

▼ 早いもので10月もう後半になってしまいました。11月12月は何かと忙しくなるので、今年もあっという間に終わってしまいそうです。夏のワークキャンプには参加しなかったのも、そろそろ「タイに行きたい病」が発症しつつあります。近頃の円高と景気の悪さによる航空運賃の値下げは海外旅行の絶好のチャンスですね。でも、ガソリンの値上がりによる燃油サーチャージの復活が起こる可能性があります。海外旅行なら今がチャンスかも…。

<キャンヘルプタイランドネットワーク通信 Vol.47>

発行 キャンヘルプタイランド
 発行人 西川 弘達
 編集人 坂 茂樹
 発行日 2009年10月24日
 住所 〒450-0003
 名古屋市中村区名駅南2-11-43
 NPOステーション内
 Tel & fax 052-566-5131
 (OPEN: 毎週火、木・土曜の13～16時頃)
 E-mail: canhelp@npo-jp.net
 ホームページ: <http://www.canhelp.npo-jp.net>